

敗戦直後の松江における人びとの暮らし

はじめに

・敗戦後、松江の人びとの「戦後の出発」を考える。

→食糧・住居・文化運動に着目。地域内の差異、戦争体験の差異に注目

1. 敗戦直後の暮らし

(1) 食糧難

①ヤミ市がある暮らし

・配給量の不足、遅配欠配による生活難。

・「闇価格調査表」

→「無限にはびこる“闇”、生きられる配給が先決」

・大橋南詰付近。賑わい。取締の対象。【史料1】

②ヤミ市の取締と対策の困難性

・取締

・ヤミ市対策としての「自由市場」【史料2】

→「自由市場」という対策：公定価格の3倍程度。ヤミ市の10～15倍と比較して市民に喜ばれる。賑わう。一方、主婦の話、余り期待していない。「顔のきく人」と「顔がきかぬ人」。「浦のおかみさん」への不満。

*戦時・戦後の状況。平等に苦しんでいるわけではない。松江地域内での差異。町と農漁村。

・松江市会での議論【史料3】

→政治・行政では根本的な対応ができない状況。人びとの生きるための活動。

③食糧難の影響・住民の動き

・治安への影響【史料4】

・ヤミをなくす行動【史料5】

(2) 住宅難

①建物疎開

・戦争末期、空襲による延焼を防ぐために実施。松江市は中国統監府からの命令に忠実に実施。市内総戸数の4分の1にあたる3187戸が強制的に疎開。

*戦後、空襲被害がなかった松江市で住宅難となる原因。戦後さらに海外からの引揚者や転入者が加わり、住宅難が深刻に。

・「不公平さ」「理不尽」を感じた関係者

②建物疎開の中止

・8月15日午後1時現在で現状のままで中止することに決定

→防空解除より先

③建物の再建

・建物再建をめぐる対立

→冬を迎えるあたり家屋の必要。しかし、疎開者には十分な資材ない。しかも土地も数倍の高値に。資材の斡旋もない。疎開者困窮。知事に陳情。

→内政部長の談話：「本省の命で急速に実施した」。そのため、「不十分な点はあったかも知れない」。「空襲を受けた戦災者のことを思へばこの不満も解決出来ることと思う」。**【史料6】** *受忍論。

→疎開者からは、資材配給の要望。近隣への流出・不平等への不満。農村への不信感。

・住宅事情（『島根県外地引揚民報』より）

→松江市（1946年10月15日現在）：応急簡易住宅119戸竣功、127戸工事中、一般住宅48戸竣功、29戸工事中。

→島根県内で住宅のない人：戦災転入者4382戸、外地引揚者5513戸 復員2206戸 建物疎開者1960戸 その他3582戸。

→親戚など縁故者の家庭に入居67%、無縁故家庭に入居30%、神社、寺院などに入居1%、公会堂など集会所に入居1%

・戦後の簡易住宅、転用住宅での暮らし **【史料7】**

→外地引揚者、戦災疎開者など「戦争犠牲者」の生活。生活環境の劣悪さ。健康、育児問題。医療機関、関係者の活動。

2. 「戦争犠牲者」の戦後

(1) 戦争未亡人と戦争孤児

・占領下の非軍事化と生活困窮者の「無差別平等」原則により軍人遺家族への援護が打ち切られる。激しいインフレ状況。生活の困難。

→戦争未亡人たちの洋裁学校 **【史料8】**

→東光学園の戦災孤児たち **【史料9】**

・松江赤十字病院社会事業部による託児所などでの幼児の健康管理

(2) 引揚者

・海外引揚者の苦難 **【史料10】**

*食糧難、住宅難の課題が直接的に影響される。引揚過程と帰国後の苦難

→自力で再生を探る。引揚者の団結。団体、運動化。

→入植へ

3. 戦後文化運動の高揚

(1) 疎開文化人と文化運動

○みづほ演劇研究所（みづほ劇場）

・声明：祖国再建するために芸能、文化に打ち込むことが「正しい日本をつくる」。島耕二の指導。【史料11】

・『山陰文学』の創刊。

・田所龍一の考え方【史料12】

→良い、明るい生活ができるような社会を実現するためお互い協力して努力することが文化運動。この街で生活する以上、この街での文化活動を行わなければならない。家庭を構成するような子供も大人も足下から広がっていくような運動が理想。これが発展して良い社会になる。そのため、個人個人が「考えること」が第一歩。

・文芸講演会。巡業公演

→農村青年との接点

(2) プランゲ文庫にみる戦後青年文化運動

① 検閲

・検閲の仕組み

・削除指示と削除跡→岩坂村青年会文化部編『青年の声』6号、1946年11月15日

・検閲箇所と比較→熊野村青年会編『意宇の流』第1号、1946年10月1日

② 青年団運動

・青年団運動活動報告：

→大庭村青年会 1947年度活動報告：衆議院立候補者立会演説会、農事懇談会、八束郡青年団幹部会、村体育大会、劇芝居上演、排球大会、村民慰安演芸会、有志キャンプ、相撲大会、文化祭など。

・女子青年団員からの発言【史料13】

→男女の関係性について。

→活動：村内生活困窮者に寄付金を配付。松江市内戦没者家庭、戦災孤児への配付。

・青年文化運動の意義【史料14】

→ i) 「農村文化運動は農民自身の自発的なる運動」。一方的な知識階級のみでの運動では意味がない。 ii) 「青年の文化運動」は「健全なる生活に立脚」したものであるべき。 iii) 「祖国の将来」は「青年の双肩」にある。

・『意宇の流』【史料15】

→ i) 「純情と燃へる熱意を持った我々青年の手によって」自由と平和の文化国家を確立。

ii) 郷土の発展、国家の再建は青年の情熱、自覚に掛かっている。 iii) 文化を通じて「完全なる人間」になるよう努力する

* 青年が国家再建を担うという意欲。文化を通じて。都市や知識階級ではなく、農村文化、

郷土文化をよくしていく、発展させていく。

③都市と農村の文化

- ・地域青年会とみづほ劇場（→松江文化同好会→テアトル・ヘルン）の関わり。【史料16】

おわりに

- ①食糧難・住宅難といった暮らしの混乱状況。自然現象ではない人為的なもの
- ②戦後の困難は、松江の人びとにすべて同様であったわけではない。地域や戦争体験の差異。困難を大きく受けた人びと。生きるための動き。一方で「受忍論」。
- ③困難な生活状況のなかで、戦後に新しい考えや声が発せられる。国家再建・郷土（農村）再建を文化を通じて担おうとする青年層の存在
- ④疎開文化人による地方文化に対する影響。農村の青年文化運動との関係性。
- ⑤占領下の検閲の問題
- ⑥敗戦直後の青年文化運動の高揚。その後の展開。朝鮮戦争期の変化に注目。

主要参考文献

- ・『島根新聞』
- ・プランゲ文庫、松江関連（『意字の流』、『山陰文学』、『団報（恵曇町青年団）』、『島根少年新聞』、『青年の声』、『島根県外地引揚民報』など）
- ・『松江赤十字病院社会事業部活動の概要』1950年
- ・毎日新聞社編『激動二十年』毎日新聞西部本社、1965年
- ・西尾忠良『事件を追って戦時後30年 島根の軌跡』松江写真植字社出版部、1976年
- ・内藤正中『島根県の百年』山川出版社、1982年
- ・『新聞に見る山陰の世相百年』山陰中央新報社、1983年
- ・『島根県警察史 昭和編』島根県警察本部、1984年
- ・北河賢三『戦後の出発』青木書店、2000年
- ・『「大手前通りの歴史を調べる会」調査結果報告書』2004年
- ・北河賢三「戦争未亡人と遺族会・未亡人会」『植民地と戦争責任』吉川弘文館、2005年
- ・『松江文化情報誌 湖都松江 疎開と戦後の松江文化』第9号、2005年